Fate/EXTRA JOJO

サイオンⅡ世

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

もしも、月の聖杯戦争が、奇妙な螺旋のように物語が展開するのだとしたら、その物語はとても奇妙な冒険となるのではないだろうか？。

これは、そんな物語の中で奮闘する、奇妙な親子の物語である。

目次

プロローグ　前編 ―― 1
プロローグ　後編 ―― 8
一回戦　一日目　Ｐａｒｔ１　奇妙な親子は注目される ―― 16
一回戦　一日目　Ｐａｒｔ２　偽りの親友と目覚める力 ―― 29

プロローグ　前編

西暦２０３２年。月面に人類のあらゆる叡智を超える物体が発見された。「ムーンセル・オートマトン」と呼ばれるその物体は、あらゆる事象をコントロールすることが可能な力を持つことが後に判明する。意思ある者が持てば世界さえも掌握できる万能の願望機「聖杯」に等しいこの物体を手に入れるため、世界各地の組織・勢力が「ムーンセル・オートマトン」の作り出す霊子虚構世界「ＳＥ．ＲＡ．ＰＨ」にアクセスし、「ムーンセル・オートマトン」が自身に相応しい担い手を選別するために行う「聖杯戦争」へと参戦するのだ。

この物語は、主人公が「岸波　白野」ではなかったらの物語である。

ある一人の少年は、孤独と言う苦悩に満ちていた。

両親を事故で亡くし、引き取られた親戚の家では、毎日のように虐待を受けていた。

そしていつしか、名前も呼ばれなくなっていった。

だかそんな少年に、ある転機が訪れた。

趣味でインターネットをいじっていた時、偶然あるサイトの掲示板を見つけた。

そのサイトの掲示板には。

「魔術師（ウィザード）達よ、時は来た。聖杯戦争開始まで残り１２時間。
参加する物はＳＥ．ＲＡ．ＰＨにアクセスし、時を待て。」
と描かれていた。
少年は意味のわからない事を書いている掲示板を見て、最初はなんとも思わなかったが、以前学校で聖杯の事に関した授業をしたことを思い出した。
聖杯とは、万能の杯と呼ばれ、どんな願いも叶えてくれると言う、夢のような物だった。
少年は、今までの自分の孤独に嫌気がさしており、この聖杯なら自分の願いを叶えてくれるんじゃないかと思い、騙されたと思いながらもＳＥ．ＲＡ．ＰＨと言う名前で検索をしながら、ＳＥ．ＲＡ．ＰＨに関するサイトも探し始めた。
そして、偶然ＳＥ．ＲＡ．ＰＨに関するサイトを見つける事に成功した。
だがそこに描かれていたのは、信じられないような内容だった。
まずＳＥ．ＲＡ．ＰＨに入るには、自分の魂の粒子化し、そこからアバターを作りあげて始めてＳＥ．ＲＡ．ＰＨことムーンセルに入る事ができるのだと。
だが少年には、そんな事ができるわけがなかった。
ただてさえ騙された気持ちでＳＥ．ＲＡ．ＰＨにアクセスするのに、アクセスするのに自分の命を使ってまで入るのには、いささか疑問と不安しか残らなかった。

だが、少年は「聖杯」と言う言葉を思い出し、なんとか自分の魂を粒子化させる方法を探した。
そしてまた偶然が重なり、魂の粒子化の方法が書かれたサイトを見つける事に成功した。
内容はよくわからなかったが、それでもいいと言うばかりに、ついにＳＥ・ＲＡ・ＰＨことムーンセルにアクセスするのだった。
だがこの時少年は大きなミスを犯していた。
それは、聖杯戦争のルールを見ていなかった事であった…。
「……い」
「お……？」
「おいったら！」
少年は大きな声を聞き、唐突に目を覚ました。
「あ、あれ…？、僕…」
「お前さあ、僕が話ている途中で寝るとかどういう神経してる訳？」
「あ、ああ、ごめんシンジ・…、なんか最近寝不足でさ…」
シンジ・マトウ。
さっきまで寝ていた少年の親友にして腐れ縁。

言葉使いは荒いが、それでも根はいい奴と言う解釈を少年は勝手にしているが、どう見てもそうは思われないのが事実であった。
「全くさあ、大体お前僕の話の２０％は聞いてないよね？、この２０％は大体お前が寝ているんだよね、僕の話はお前にとって子守唄かなにかですか？」
「そ、そうじゃないよ、僕は本当に寝不足なだけで…、それにシンジの話っていつも長いし…」
「はあ？それって僕がお前にとっては迷惑な存在だって言う事で解釈していいのかなぁ？ええ？」
キーンコーンカーンコーン
シンジが怒り混じりの声を出している時に、ようやくお昼休みを終えるチャイムが鳴った。
少年はこの時おもわず「ほっ」と胸をなでたのは言うまでもなかった。
「ちっ、もうお昼休み終わりかよ…、ったく、いいか、次はちゃんと僕の話を聞くんだぞ！」
「はいはい…」
だが少年はこの時変な違和感を覚えていた。それは、誰も自分の名前を言ってくれなかったのである。

シンジはいつもお前呼びされてるからまだよしとしたものの、先生や同級生にも名前どころか、苗字も言われなかったのである。

その違和感はとうとう頂点に達してしまい、思わず授業中に声をあげてしまった。

「先生！」

「ん？どうした？なにか質問か？」

「先生、あの、僕の苗字と名前、覚えていますか？」

「？おかしな事を聞く奴だな、＿＿＿＿＿＿＿＿だろ？それがどうかしたのか？」

この時少年はさらに違和感を覚えた。

先生は確かに自分の苗字と名前を言ってくれたが、言った瞬間にノイズのような音が聞こえて、何も聞こえなかったのである。

「せ、先生、あの、度々申し訳ないのですが、もう一度言ってもらえませんか？」

「？聞こえなかったのか？＿＿＿＿＿＿＿＿。もう何度も言わせるなよ…」

クラスのみんなはクスクスと笑っていたが、やはり苗字と名前を言った時にノイズが聞こえて何も聞こえなかったのだった。

少年は「何度もすみませんでした」と言って席に座ると、隣にいたシンジが小声で少年に話しかけてきた。

「お前、自分の苗字もわからないとか、ありえなくないか？、まあ僕としては授業が少し

短くなったのだと思うと、結構楽だけどね」
そう言ってシンジは授業に集中したかったのか、そのまま先生のいる黒板に目を向け直した。
少年はやはりこの違和感が拭えなくなり、授業が終わるその時まで、消える事はなかった。
やがて放課後となり、少年はシンジと別れると、決まっていつもの場所に行く。
2階の教室前に着くと、少年は静かに声を出した。
「――――今日もいる？…ママ…」
少年がそう言うと、誰もいない教室のドアがひとりでに開かれ、教室の中を少年が覗くと、後ろから優しく包み込まれるように、誰がが少年を抱きしめていた。
『お帰り…、今日の授業はどうだった？』
「いつも通りだよ…、でも、急に僕の苗字と名前がわからなくなっちゃったんだ…。
ママ、僕の名前、わかる？」
『もちろん…、と言いたい所だけど、あなたのその名前がわからない理由は、なにか特別な力によって記憶を封じられているようね…、でも大丈夫、その内きっと記憶が戻るわ…。
だから今は、聖――――――――争に備えて、ゆっくり休みなさい…」

しばらくすると、少年を包みこんでいた優しい腕は消えていた。
少年は母と慕う見ず知らずの人物の言うことを聞き、そのまま家へと帰っていった。

つづく

プロローグ　後編

『……ふむ、君もダメか』
『そろそろ刻限だ。君を今度こそ最後の候補とし、その落選をもって、今回の予選を終了しよう』
『――――さらばだ。安らかに消滅したまえ。』

少年は名前以外の記憶を取り戻し、あるべき場所へ戻る為、不思議な形をした人形と共に、この地まで来た。
だが、現実はひどかった。否、酷すぎたが少年にとっては正しい答えだった。
その現実とは、すなわち「死」と言う言葉一つだけだった。
だんだんと少年の体が冷たくなり、とうとうあの世へと向かう準備が整ってきてしまっていた。
いやだ。
いやだ。
いやだ　いやだ。

いやだ　いやだ　いやだ。
僕はまだ　死にたくない…！
動いてよ…　動いてよ僕の体…！
もう嫌だ…！ひとりぼっちは嫌だよ…！
誰か…　誰か…　助けて…
すると少年はあることを思い出した。
それは、あの誰もいない教室で出会った母と呼んでいた「少女の声をした見ず知らずの声」の事であった。
『ねぇボク、もしあなたが誰かに助けて欲しいと思ったら、その時、私に助けてって言ってくれないかしら？』
『…なんで？』
『だって、あなたは、名前も、姿さえ見たことのない私を、「ママ」って呼んでくれたんだもの、母親が息子を助けるのは当然の事でしょう？』
『…そうだね、そうだよね…、わかった、もし僕が誰かに助けて欲しいと思ったら、絶対にママに助けてって言ってみるよ』
『…ありがとう…、名も知らない、私の坊や…』
――――――て

『…む？』

た――――け――――

たす――――て

たすけて……ママぁ……！。

少年は最後の力を振り絞り、姿も知らない母を呼んだ。

…やっと、呼んでくれたのね、名も知らない私の坊や…

あなたのその言葉、ちゃんとお母さんに伝わったわ

待っててね、すぐにそっちに向かってあげるから…

瞬間、広間に存在するガラスが音を立てて砕け散った。

少年はその音がした方に顔を向けると、そこに立っていたのは。

「マ…マ…、なの…？」

「はじめまして、私の坊や…」

銀色の髪を揺らしながら、とても美しい着物をなびかせている、２０代と思わしき女性が立っていた。

少年はその姿を見たら、不思議と安心感が出て、そのまま女性の元へと静かに向かい大泣きしながら女性に抱きついた。

「うぅっ…、うぅわあああああんっ‼？マァァマァァ‼？」

「…よしよし、よく頑張ったわね…とても怖かったよね…」
女性は少年を優しく抱きしめると、なんも嫌がりもせず、軽蔑もせずに優しく頭を撫でながら、少年を抱きしめていた。
だが、そんな束の間、少年を殺そうとした人形がまた動きはじめ、少年と女性にむかって、その鋭い手と思わしき物で攻撃した。
「マ、ママ！後ろ！」
「……ちっ」
少年が人形に気づくが、時すでに遅く、人形はもう女性の顔の近くまで迫っていた。
少年はとっさに目をつむると、突然、金属が大きく打ち付けられる音がした。
少年は少しずつ目をあけると、そこには攻撃している人形と、日本刀を持った母の姿だった。
「そういえば、お母さんの名前教えてなかったわね…」
「？」
「サーヴァント　アサシン　あなたの気持ちに応えて召喚されました、どうかこれからもよろしくね、ボク」
アサシンと名乗る女性が少年に自己紹介すると、少年の右手に激痛が走り、赤い痣のような物ができていた。

「ッ…！、何、これ？」
「それは令呪、それがある限り、お母さんは坊やの側を離れないわ、でも説明は後、まずはこの人形を倒さなくっちゃ」
　アサシンがそう言うと、一度人形を微妙に遠くまで吹き飛ばし、態勢を整えた。
「さあ坊や、お母さんに指示を頂戴、お母さんは坊やが思ったとおりに動いてあげるから」
「じ、じゃあ、遠慮なく…、勝って、ママ！」
「ＯＫ、坊や（マスター）、とてもいい指示ありがとう！」
　マスターからの指示をうけたアサシンは、再び人形の元へ向かい、完全に攻撃パターンを読みきったかのように人形を切り伏せた。
　すると少年は、あることに気づいた。
　それは、アサシンの周りをウロチョロしている小さな黒い布をまとった妖精のような姿だった。
　少年は目をこすってもう一度見てみたが、やがて妖精のような存在はうっすらと透明になっていき、やがてアサシンも透明になっていた。
「あ、あれ？、ママ、どこにいったの？」
　少年がアサシンを呼んでも返事はなく、それに気づいた人形が少年に向かってカクカ

クと音をたてながら近づきはじめた。
「い、嫌だ！ママ！どこにいるの⁉？、お願いだよ！僕を一人にしないでよ！」
しかし、少年がいくら叫んでもアサシンは現れる事は無く、とうとう人形がすぐ近くまで迫ってしまっていた。
『ミツ、ケタ、我ガ、拠リ所を…』
「？、よりどころ？」
少年が声の元を探すも、それは人形から発しているのだと知ると、警戒を少し解いてしまった。
「君は、一体なんなの？」
『名ハ、無イ…、ダガ、才前ハ、我ガ、拠リ所、才前ノ、力ニ、ナル…』
「それってどういう…」
少年が人形に意味を聞こうとすると、人形の後ろから突然がシャンと音がして、そのまま人形は少年の元へ倒れた。
「ふー、油断させる為とはいえ、ちょっとヒヤヒヤしちゃった、大丈夫？坊や」
「う、うん、ちょっと人形が重いけど、なんとか」
「そう、ならこんなとこ早く抜けましょ？」
アサシンが少年に向けて手を差し伸べると、少年の元へと倒れていた人形が突然光を

放ち、その光が粒子となり、少年の体に入っていった。
「う、うわっ⁉？」
「ぼ、坊や⁉？」
光の粒子が全て入ると、少年はそのままばたりと倒れてしまった。
「坊や⁉？、しっかりして！坊や！」
そしてしばらくすると、少年から寝息が聞こえてきて、アサシンは疲れて寝てしまったのだと思った。
「もう…、坊やったら、心配させないでよ…」
そうアサシンが言うと、またどこからか声が聞こえた。
『中々素晴らしい親子愛を見せてもらったよ、君のようなマスターを見るのはこれで3度目だ』
『だが、親子の愛はどうであれ、君は聖杯戦争への参加資格を手に入れられた。』
『喜べ、奇妙親子達よ、君たちの願いはようやく叶う…』
『それと、君達に何者からか祝辞が届いている。〝光りあれ〟と』

――――では、これより聖杯戦争を始めよう。
――――いかなる時代、いかなる歳月が流れようと、戦いをもって頂点を決するのは

人の摂理。

――――月に招かれた、電子の世界の魔術師ウィザードたちよ。汝、自らを以て最強を証明せよ。

それこそは始まりの合図。開戦の狼煙。

今ここに、奇妙な親子の物語が始まる…。

つづく

一回戦　一日目　Ｐａｒｔ１　奇妙な親子は注目される

泥濘の日常は燃え尽きた。
魔術師による生存競争。
運命の車輪は回る。
最も弱きものよ、剣を鍛えよ。
その命が育んだ、己の価値を示すために。
９９９人→１２８人

夢を見た。
その夢は、とても悲しい夢だった。
一人の女性が壊れた建物の前で、泣いていたのだ。
壊れた建物の瓦礫からは、少年と同じぐらいの歳であろう子供の手や顔半分などが覗かせていた。
しばらくすると、女性の前に白い髪の色をした神父らしき人物が近づき、話しかけていた。

『悲しいかね？だがその悲しみは彼らを天国に招く事はない。お前のその悲しみは、ただの自分勝手な涙にすぎない』

神父はそう言うと満足したのか、女性の前から姿を消した。

神父が姿を消すと同時に女性は立ち上がり、憎悪の表情を浮かべながら壊れた建物から姿を消した。

そして少年の意識は、ここでフェードアウトするのだった。

「う、うーん…」

少年が目を覚ますと、そこに広がっていたのは、学校の保健室と思わしき場所だった。

「…ママ？」

少年があたりを見渡しながらアサシンを呼ぶと数秒とかからずに少年の前にエプロン姿のアサシンが現れた。

「あら、やっと目が覚めたのね坊や、待ってて今桜さんとお料理してるから」

「あ、あの…、ここ保健室なんですけどぉ…」

少年が目をこすりながらベットから出ると、カーテンの中からでもわかる朝ごはんの匂いと共に少年は思わず我が家に帰ってきた気持ちとなっていた。

「…いい匂い」

「あ、おはようございます、よく眠られた所で申し訳ないのですけど、ちょっと手伝ってくれるとありがたいのですが…」
「う、うん、わかった」
　少年は保健室の生徒と思わしき少女と共に、あらかじめ用意されていたお皿やらコップを並べた。
「あ、あの…、あなたは、この保健室の人ですか？」
　少年がそう尋ねると、少女は笑顔を浮かべながら答えた。
「はい、間桐　桜と申します、ここ保健室を担当している健康管理ＡＩです。どうぞよろしくお願いします」
　桜と名乗る少女はぺこりと頭を下げると、食器並べを再開した。すると少年はあることに気がついた。
　テーブルの奥に神父と思わしき人物が座っている事に気づいた少年は、その神父に言葉をかけた。
「あ、あの、あなたは？」
「む？これは失礼、あまりに身勝手な行動をしているサーヴァントを確認しにきただけだったのだが、なぜかそのサーヴァントに食事を共にしないかと言われたのでね。聖職者の身として誘われた以上は無下に断る訳にもいかず、こうして座らされていると言う

事だ」

少年は神父の言っていることが自分の思っていた答えとは正反対だった為か少しポカーンとしていたが、後ろから足音が聞こえたと同時に意識を戻した。

「もう、言峰さんったら、あんまり坊やを困らせないでくださいね？」

「君のその行動そのものが我々運営ＮＰＣにとって困った行為なのだがね？」

アサシンと神父が話し終えると、アサシンが作ったと思われる紅鮭と味噌汁がテーブルに置かれた。

「坊や、紹介するわね、こちらの神父さんは言峰綺礼さん。この聖杯戦争の監督をやっている人よ」

「始めまして、若き少女よ」

言峰神父が普通に挨拶するも、少年はキョトンとした感じに言峰に話した。

「あ、あのぅ…、僕、男なんですけど…？」

言峰が少年を少女と勘違いしたのには無理もなかった。

少年の見た目は、背は小さく。髪は背中のあたりまで長く。髪の色もアサシンと同じ銀色で、外見からの年齢だったら約７歳といった所だった。だが極め付きは少年の格好だった。

「…ふむ、ではこれは私の勘違いかね？女性物の服を着ているのに自分を男と言うのに

は何か訳があるのかね？」
　神父が少年にそう言うと、少年は改めて自分の格好を見ると、その服装はまさにロリータファッションと言うのに最適な服装だった。
　上着は紫がよく似合いそうな感じで、装飾には花や蝶といった感じにされており。
　下のスカートはフリルがきいたミニスカートとなっており、初対面の人がどう見ても女の子と勘違いしても無理はなかった。
「…あれ？なんで僕女の子の格好なんて…、ま、まさか！」
　少年は慌ててベットのところに戻り、皆に見られないようにスカートをめくると、少年の目に焼き付いたのは、少年のあるべき物が下についていなかったのであった。
「な、無い！あるべき物がない！どういうことなの⁉？」
　少年は確かに教室にいた時には男の制服を着ていて、あるべき物もあったはずなのに、いざベットから目を覚ますと少年は少女へと変わっていたのだ。
　少年は慌てふためいてアサシンに確認をとろうとした。
「ねぇママ！僕ママと始めて会った時には男だったよね⁉？そうだよね⁉？」
「え、ええそうよ、聖杯戦争予選の最後のあたりで坊やは男の子だったわよ？でもよくよく考えたら、寝起きの坊やの顔はよく見てなかったわね…、神父さん、何かわかります？」

「さて…、こういう事はあまり前例がないのでな、桜君なら何かわかるのではないのかな？」
「さ、さあ？、私もこういう事は始めてなので、多分何かしらのバグの影響だと思うのですけど…」
少年はこの訳のわからない状態の中、段々頭がクラクラとし始め、ついには倒れてしまった。
バタン
「ぼ、坊や⁉？」
「だ、大丈夫ですか⁉？」
「…やれやれ、面倒ごとがまた増えたか…」
数分後に少年が目覚めると、少年はまだ頭が混乱していたが、それでもバグならいつか治るとそう信じ、アサシンの作った料理を食べることにした。
桜や言峰もアサシンが作った朝食を食べると桜は、「おいしい…、なんか、とっても家庭的な味がします」と言ってアサシンが作った朝食を美味しそうに食べていた。
一方の言峰は、「ふむ…紅鮭の焼き加減や、この味噌汁の薄め具合…、どれをとっても見事と言うべきか…」と言って思ってた以上に美味しそうに食べていた。
朝食を終えた後、言峰は少年（もとい少女）に携帯端末とマイルームのキーと聖杯戦

争のルールの他に、掲示板に最初の対戦相手が書いてあるから見た方がいいと言い残し保健室を去った。

なお、去り際にはアサシンの方に振り向くと、「また食事に誘うのなら、是非ともご一緒したいものだ」と言って今度こそ保健室を去った。

その後桜が少年に朝食のお礼とばかりに支給品を用意し、「今度は私にもお料理教えて下さいね！」とアサシンに向かって言うと、アサシンは「ええ、もちろんよ、今度また一緒に作りましょ、桜さん」と言って少年とアサシンは保健室を後にした。

「あ、あのアサシンさんのマスターちゃんの名前、尋ねるの忘れてました…、まあ、また来た時ていいですよね」

少年とアサシンが言峰が言っていた二階の掲示板で、自分の対戦相手を見ようとすると、少年はやっぱりと言うばかりに落ち込んでしまった。

理由は、自分の名前が書いてなく、対戦相手の名前とアリーナの名前しか書いてなかったのだ。

すると、何かを察知したのか、先ほど一緒に朝食をとった言峰が少年の元へと姿を見せた。

「どうしたのかね少年よ？、何かトラブルでもあったのかね？」

「…神父さん、実は僕の名前がこの掲示板に表示されてないんですけど…」

言峰は掲示板を確認すると、すぐに少年の言っていた事の意味を知った。
「ふむ…、一応聞いておくが少年よ、アサシンから聞いてはいたが、名前と苗字がわからないそうだな。
他に覚えている事はあるかね？」
少年は頭をフル回転させて覚えている事を思い出そうとすると、自分がなぜ聖杯戦争に参加したのかの理由以外、思い出す事ができなくなってしまっていた。
少年はこの事を伝えると、言峰は真剣な表情で少年に言った。
「少年よ、一応確認の為に聞くが、私が君に言った聖杯戦争のルールや知識それにＳＥ・ＲＡ・ＰＨとムーンセルに関する情報や知識は覚えているかね？」
少年はそこの知識だけは言峰が事前に言ってくれていた為覚えていた。
ムーンセルとは、月面で発見された太陽系最古の物体。元は聖杯と呼ばれていたが、後にムーンセルと呼ばれるようになる。
そして聖杯とは、あらゆる願いを叶える万能の願望器にして、地球の過去現在未来全てを観察し、記録する演算装置。
それを手に入れるべく魂を月と繋げたマスターたる１２８人（予選敗退者を合わせると９９９人）の、魔術師（ウィザード）と呼ばれる霊子ハッカーが　電子虚構世界「ＳＥ・ＲＡ・ＰＨ」を舞台に地球上の歴史の記された英雄こと英霊たるサーヴァントを操

り、最後の一人になるまでトーナメント方式で戦う。
それが、聖杯戦争。
そしてその聖杯戦争の舞台となるのが、このＳＥ．ＲＡ．ＰＨが作りだした月海原学園である。
さらに少年はサーヴァントの事に関する知識も覚えていた。
サーヴァントは生前成した偉業によって割り当てられる七つのクラスがある。
剣の英霊、セイバー。
槍の英霊、ランサー。
弓の英霊、アーチャー。
騎乗の英霊、ライダー。
魔術師の英霊、キャスター。
暗殺の英霊、アサシン。
狂戦士の英霊、バーサーカー。
このほか、幾つかイレギュラークラスがあり、
裁定者の英霊、ルーラー
毒婦の英霊、ファニーヴァンプ
盾の英霊、シールダー

などといったクラスをもった英霊もいる。

また、聖杯戦争には敵サーヴァントと決戦を行う前には6日間の猶予期間（モルトリアル）が存在する。この6日間のうちに敵サーヴァントの情報（マトリクス）入手したり、アリーナで暗号鍵（トリガー）の探索やサーヴァントの鍛錬を行わなければならない。

だが、猶予期間内に月海原学園の中で戦闘を行った場合、サーヴァントの能力を低下させられるなどの重大なペナルティが課せられる場合もあるが、アリーナ内にて猶予期間中に敵サーヴァントと戦闘した場合は3分間だげ猶予が与えられるが、それ以上の戦闘を行った場合相応のペナルティが両者の内の誰かに与えられる。

そしてそのアリーナとは、暗号鍵の探索、鍛錬を行う場所。一度入場すると、その日の学園内での探索は不可能となり、アリーナを出ると強制的に夜になる。また、アリーナには敵性プログラム（エネミー）と呼ばれるプログラムがあちこちに点在していて、これに敗れて敗退した場合聖杯戦争で失格となり消去（デリート）される。

ここで重要となるのが、暗号鍵の存在である。

暗号鍵とは決戦場に入場するための鍵。暗号鍵は各回戦ごとに第一暗号鍵（プライマリトリガー）、第二暗号鍵（セカンダリトリガー）と2本あり、アリーナのどこかに存在する。1つ目と2つ目の暗号鍵はそれぞれが第一層、第二層で生成されるが、これらは

必ず、猶予期間中に入手しなければならない。決戦日までに入手できなかった場合は戦わずして即脱落となる。

次に重要となるのが、敵の情報をまとめる、情報マトリクスの存在である。

情報マトリクスは、それぞれのマスターたちに与えられた携帯端末に搭載された機能の一つ。対戦相手の情報が少しずつ記録されていく機能で、新たな情報を得るたびにマトリクスレベルと呼ばれる情報の開示がＬｖ０　―　ＬｖＥまでの四段階に分けて行われる。Ｌｖ０から３までは猶予期間の間に対戦相手と接触をはかるなどして手に入れることが出来、最後のＬｖＥは決戦当日にそれまで得た三つの情報を整理することで手に入れることが出来る。

そして最後が、サーヴァントとの契約において必ずと言っていいほど出てくる令呪の情報を少年は思い返した。

令呪は、各マスターの体に刻まれた三つの形から成る紋様。自らのサーヴァントに対する３つの絶対命令権であり、「不可能」を「可能」にする使い捨ての強化装置。また、聖杯戦争本戦の参加条件でもあるので全て失うと自動的に敗北となる。

少年は聖杯戦争に関する知識や情報を言峰に伝えると、安心した様子で語った。

「よろしい、ならば君の記憶喪失の原因は、おそらくは無理なダイブによる代償だろう。しばらくすれば治るとは思うが、もしなにか不安があるようなら、保健室に向かうとい

い。

さあ、早く掲示板を確認し、アリーナへ向かうといい。ちょうど第一層が解放されると思うからな」

そう言うと言峰は少年達を後にし、1階へと足を運んだ。

少年はそれを見送りに言峰の方に向かうと、少年は以外な言葉で言峰にお礼を言った。

「何から何まで助けてくれてありがとう、パパ！」

『⁉？』

突然、二階の廊下と一階の廊下が騒がしくなった。

その騒ぎの元の原因は少年の言葉だった。何を間違ったら言峰の事を父親と言うのかがわからない運営ＮＰＣや他のマスター達は少年に対して不信感抱き始めた。

『おいおい聞いたかよ今の？』

『ああ、あの基本何考えてんのかわかんねぇエセ神父に、あの女の子パパだってよ！』

『なんか変わった子じゃない？あの子』

『それよりもおうどん食べたい』

少年は何かマズい事を言った感じがしたのかアサシンに顔を向けると、なぜがニヤニヤしていたので聞くのをやめると、すぐに言峰の所へと向かった。

「あ、あの、迷惑でしたら、もう会わないようにしますけど、その…」
すると言峰は少年に向けて以外な言葉を言った。
「気にする必要はない、早く掲示板を確認するといい」
そういった後、今度こそ言峰は一階に姿を消した。
少年の周りの人達は、階段から降りる言峰を見ていたらしく、その顔はとても愉悦そうな感じだと廊下で騒がしく話していた。一方で少年は、言峰が一階に降りるのを見届けると、アサシンのいる掲示板に戻った。
「坊やはああいった感じのお父さんがいいの？」
「うん、きっとわた…、僕のお父さんはああいう感じじゃないかなーって思ったの」
「そう…」
少年は少し女の子になりかけたが、なんとか男の子に戻り、再び掲示板を見た。
そこに書かれていたのは、自分の名前と思わしき部分と対戦相手の名前と決戦場の場所だった。
『マスター：シンジ・マトウ
決戦場：一の月想海』
つづく…。

一回戦　一日目　Ｐａｒｔ２　偽りの親友と目覚める力

『マスター…シンジ・マトウ
決戦場：一の月想海』
少年心が揺れた。理由は予選で友達となったあのシンジが対戦相手だったからである。
アサシンが少年の表情を見ると、とても不安な顔をしており、微かに震えているのがわかった。
「シン…ジ…」
「坊や、この対戦相手とは知り合いなの？」
「…予選中で友達になった人なんだ…」
「そう…」
アサシンは少年を抱きしめると、少年の頭を撫でながら小さく囁いた。
「大丈夫よ坊や、どんな事があっても、お母さんは坊やの側を離れないから…」
「うん…、ありがとう、ママ」
しばらくすると、後ろから足音と男と思わしき声が聞こえた。

「へぇ～、こんな可愛いお姫様達が僕の相手だなんて、なんか気が抜けちゃうな～」
少年とアサシンが声のした方に顔を向けると、そこに立っていたのは海藻類によく似た髪型をした男、シンジ・マトウが立っていた。
しかしシンジは少年の姿をよく見ると、なぜか顔を赤くし始めた。
「おお…、よく見ると結構可愛いじゃないか、ますます気が抜けちゃうじゃないか！。おまけにサーヴァントも中々の美人じゃないか、いや～、僕はなんて運がいいんだ！」
「…浮かれている所申し訳ないてますけど、私達に何か？」
アサシンが少年を守るかのように前に出ると、シンジは少し機嫌を悪くしたのか、すぐに元の表情と思わしき顔に戻った。
「別に、ただ対戦相手を見に来ただけですよ、それにしても、名前を隠すなんてヒドイじゃあないか、教えてくれたっていいでしょうに。」
「…ぼ、僕の、名前？」
少年は少しだけ顔を出すと、シンジはそれを見逃さず、またすぐに機嫌を直した。
「そうさ、君の名前が知りたいんだよ。別にいいだろ？減るもんじゃないんだしさ？」
「…ママ」
「…わかったわ、ママに任せて」
するとアサシンは、どこからか紙とペンを出し、スラスラと書き終えると、その紙を

シンジに渡した。
「これが娘の名前です。これで満足ですか?」
「お、おう、どうもありがとう…」
シンジはいきなりの事でビックリしたが、名前が書いてある紙を受け取ると、また機嫌をよくした。
「へ〜、梨野　ナナちゃんか、可愛い名前じゃあないか!。じゃあ僕はアリーナに行くから、気が向いたら会いに来てね、ナナちゃん?」
そう言うとシンジはルンルンとスキップしながら一階のアリーナまで足を運んだ。
一方で少年は、アサシンがつけてくれた名前に少し喜びながらアサシンに向かって話した。
「ねぇママ、梨野ナナって僕の名前でいいの?」
「ええそうよ、ずーっと坊やって言うのもなんか失礼だしね。だから名前を思い出すまで、坊やの名前はナナちゃんよ?。女の子みたいな名前だけど、いい?」
「うん!それに、今の僕は女の子だしね、それでいいよ」
「よかった、じゃあこれからもよろしくね、ナナちゃん?」
「うん!ママ大好き!」
そう言うと少年ことナナはアサシンに嬉しさのあまり抱きつき、アサシンはそれに答

えるかのように笑顔を見せながらナナの頭を撫でた。
その光景を見ていた運営ＮＰＣや他のマスター達は、一部にハアハアと変態みたいに息を荒い物を合わせて、皆ニコニコしていた。
しばらくすると、ナナはアサシンを霊体化させずに手を繋ぎ、そのまま校舎を探索する事にした。
それから数十分後、ナナが屋上に上がってみたいとの要望を受けて、アサシンはナナを連れて屋上へと足を運んだ。
屋上に着くと、ナナは早速と言わんばかりに走りだし、景色を見ようとはしゃぎだした。
「ママ！早く早く！」
「はいはい、慌てなくても景色は逃げませんよ？」
すると突然、ナナの前に人が出てきて、そのままぶつかってしまった。
ナナはぶつかった衝撃で尻もちをつくと、すぐ様アサシンが駆け寄った。
「いたた……！」
「大丈夫ナナちゃん？」
「ご、ごめんなさい！大丈夫？」
ナナの前にしゃがみながら駆け寄ってきたのは髪がロングの少女で、隣にはサーヴァ

ントと思わしき赤い外装を見にまとっている男がいた。
その男をナナが見ると、ナナは思わず意外な一言を言った。
「…お兄ちゃん?」
「!」
赤い外装の男はナナが言った一言に若干驚き、すぐに目をそらしてしまう。
「よかった、怪我は大丈夫みたいですね、お名前はなんて言うの?」
「な、梨野ナナ、です…」
「ナナちゃん…か、いいお名前ね、私は岸波白野っ言うの、気軽にはくのんって呼んでね、ナナちゃん」
そう白野が言うと、ナナに手を差し伸べ、ナナはそれに応えて白野の手を握って、そのまま身を起こした。
しばらくすると、白野のサーヴァントもナナに近づき、ナナに話しかけた。
「…先ほど私の事を兄と呼んだみたいだが、私の聞き間違いか?」
「え?、ああ…ごめんなさい、なぜがそう言ってしまって、ご迷惑でしたら謝ります…ごめんなさい。」
「いや…、ただ少し気になっただけだ、気にしないでくれ」
「?変なアーチャー」

その後ナナと白野は屋上でしばらく雑談しながら話し終えると、白野とアーチャーはマイルームに戻ると言って屋上を後にした。

ナナも少し疲れたのか眠くなってきてしまい、アサシンとまた手をつないで、自分達もマイルームへと向かった。

マイルームのある教室につくと、言峰から渡されていたマイルームキーが光り、ロックが解除される事を確認すると、ナナはドアを開けた。

普通のマイルームであらば教室の一環に椅子やら机やらを並べただけなのだが、ナナのマイルームだけは違っていた。

「マ、ママ、ここ、教室だよね？」

「そ、その筈だけど…、これじゃあまるで…」

一言で言い表すなら、一軒家の家の玄関そのものだった。

アサシンとナナが一応靴を脱いでリビングと思わしき所まで歩き、ドアを開けると、やはりそこには少ししか家具はなかったが、一軒家のリビングがまるまると広がっていた。

一応確認の為にナナとアサシンはマイルームキーを見ると、裏に何か小さな紙がセロハンテープで止められていた。中を見て見ると、「朝食の礼だ、ゆっくりとくつろいでくれたまえ　神父より」と書かれており、恐らくは言峰のおかげであると理解した二人は、

そのお言葉に甘えてしばらくゆったりとマイルームで過ごす事にした。
夕方になると、アサシンが「そろそろアリーナにいきましょ?」と言ったので、ナナはマイルームを後にし、アサシンと再び手を繋ぎながらアリーナへと向かった。
一階に降りるてしばらくすると、突然赤い服を着た少女に止められた。
「ちょっと、そこのマスターとサーヴァント、少しだけお時間いいかしら?」
すると赤い少女は、アサシンをジロジロと見ると、なぜかため息をついた。
「ちょっとあなた、なぜ霊体化しないの?それじゃあ自分の正体をバラしているようなものよ?」
「娘が手を繋ぎたがっていた為よ、何か問題あって?」
「娘?その女の子があなたの?でもあなたサーヴァントでしょ?なんであなたの娘なのよ?」
「…娘が私をママと呼んでいるからです。だから私はこの子の母親でいるのです、それも何か問題あるのですか?」
そうアサシンが言うと、少女はぐぬぬと言いながら「邪魔して悪かったわね、もう行っていいわ」と言ってナナ達の前から姿を消した。
そしてようやくアリーナの前につくとナナは扉を開き、アリーナの中へと入った。
アリーナに入ってしばらくすると、ナナ達の前にエネミーと思わしき物体が浮かんで

いた。
「ナナちゃん、これがエネミーよ。
　お母さん達サーヴァントは、このエネミーを倒す事で経験値が増えて、より一層強くなれるの、だからナナちゃんは指示か援護に集中してくれるとありがたいんだけど、いい？」
「うん、わかった、気をつけてね、ママ」
　すると、敵性エネミーがアサシンに気づくと攻撃しようと近づくが、アサシンはそれに気づき、腰にある日本刀を抜いた。
「ナナちゃん、早速指示をお願いね」
「うん、ママ前に出てエネミーを攻撃して！」
「りょーかい！」
　ナナからの指示をうけたアサシンはすぐ様敵性エネミーを持っていた日本刀で両断させると、敵性エネミーは霧のように消えた。
「やっぱりね、ナナちゃんから送られてくる魔力がかなりいいわ、おかけでお母さんは本来の力を出しながら戦えそうね」
　ナナからの魔力供給によって本来の力を出しながら戦うアサシンは、その調子でナナと共にどんどんエネミーを倒してゆき、２０体目のエネミーを倒した時、ナナはある違

和感を覚えた。
それは視線。何故かは知らないが、ナナは二人の視線に見られている感じがした。
そして違和感は嫌な予感へと変わり、その予感が的中してしまう。
「くくく…、本当にのこのこやってくるなんてね。まあいい、僕のサーヴァントの情報を見る前に、悪いけど消えてもらよ」
一発の銃声が聞こえ、その銃弾は恐らくアサシンに向けられたと思い、ナナはとっさにアサシンを庇おうとした。
「ママ!」
「え?」
すると、ナナの体が光りはじめ、ナナの後ろから聖杯戦争予選で使われていたあの人形が出てきて、その人形が銃弾を跳ね返した。
跳ね返った銃弾は、そのまま使用者に帰っていったが、使用者はそれをマスターと思わしき人物を抱えながらよけた。
「ナ、ナナちゃん…!今のって…」
「あ、あれ?なんで予選で使われてた人形が…?」
人形に気がついたナナは驚くも、早々驚いてもいられなかった。
何故なら、もう近くに敵マスターとサーヴァントがいたからであった。

「へ、へぇ～、驚いたな～、まさか君、うちのサーヴァントと同じ物が使えるなんてね」
「シンジ…」
「ま、まあいいさ！、こういう事もあるよね！。お詫びと言ってはなんだけど、僕のサーヴァントを見せてあげるよ！」
　ナナはシンジのサーヴァントをよく見てみると、上半身をタイツと網で合わせたような服装で、片手には武器と思わしき拳銃が握られていた。
「…あんた、スタンド使いだったんだな、正直驚いたが、見た所だと全然使いこなせてないみたいだな。
　先程は奇襲をかけて悪かったな。
　俺のボス（マスター）は随分と卑怯なやり方を好むんでね、これじゃあ俺が生前にやってた事となんの変わりもないな」
「ま、待って下さい、スタンド使い？スタンドって何の事なんですか？」
「悪いが、そう以上は言えないな。
　ボス（マスター）の命令なんで、ここで倒させてもらうぞ」
　そう言い終えると、シンジのサーヴァントは拳銃をナナに向けた。
　それを庇うようにアサシンが前に出た。
「…あんた」

「ママ？」

「…ナナちゃん、お母さんにしっかり捕まってて、今のナナちゃんは混乱状態にあるから、あのサーヴァントに立ち向かうのは死にに行くような物よ。だから、ここは…」

「…ここは？」

「お、おい？何話してんだあんたら？」

ナナはとっさにアサシンの背中にのり、おんぶされた状態になると、アサシンは意外な事をした。

「にぃぃげるのよぉぉぉぉ!!？ナ～ナちゃぁぁぁん!!？」

『えええええええええええええ!?？』

　これにはナナどころかシンジとそのサーヴァントも驚き、思わず呆気にとられてしまった。
「はっ！し、しまった！おいアーチャー！何やってんだよ！さっさとお前のスタンドって奴で始末しろよ！」
「…ちっ、逃げてる奴に使うのもどうかと思うが…、いけ！セックス・ピストルズ！」
「っておいぃ⁉？、お前なに正体バラすような真似してんだよ⁉？」
　サーヴァントが銃を撃つと、その銃弾から声が聞こえた。
『野郎共！行くぜぇぇぇぇ‼？』
『イィィィィッはあああ‼？』
　銃弾は壁や床など色々な所に当たりながら徐々にナナ達に迫っていた。
「マ、ママ！なんか銃弾が迫ってきたよ⁉？」
「あらあら、やっぱり思った通りの行動してくれるわね、彼は、ナナちゃん、しっかり捕まってて！」
　するとアサシンは、ナナを抱えると、後ろから黒い布に包んだ小さい妖精のような物体が出てきた。
「幽霊姿の影（ゴースト・シャドー）」

そうアサシンが言うと、アサシンとナナの姿が透明になっていき、やがて全身が透明になった。
それを見ていたシンジは、驚きを隠せていなかった。
「き、消えた?、もしかして、お前のスタンドって奴の仕業か?」
「…いや、逃げられたな。おまけにトリガーまでとっさに取りやがった。こりゃあしてやられたなボス」
「な、なんだって⁉?。くそっ!あのサーヴァントと言いあのマスターと言い、どいつもこいつと僕をバカにしやがって‼?。くそっくそっくそぉ‼?」
シンジは地面を荒々しく踏みながら悔しそうな表情を浮かべていた。
出口に到着し、校舎に戻ったナナ達は、その足でマイルームに戻り、アサシンと情報を整理した。
「まず、あのサーヴァントについてね。あのシンジって子が言ってたけど、まずクラスはアーチャー。
そして他の情報はスタンド使い、セックス・ピストルズ、もうこれは正体バラしているような物ね。ナナちゃんは誰かわかる?」
「…ゴメン、全然わからない。おまけに僕、スタンド使いだなんて言われるし、もうなにがなんだが…」

ナナは頭を抱えながら何がなんだかわからなくなり、混乱していると、アサシンはナナをいつものように抱きしめ、安心させるように頭を撫でた。

「大丈夫、大丈夫よナナちゃん。今はゆっくり休んで、これからの事を考えましょ？」

「…うん」

こうして、ナナとアサシンは寝室に入り、アサシンはナナに寄り添うように抱きしめながら眠りに入った。

つづく…